

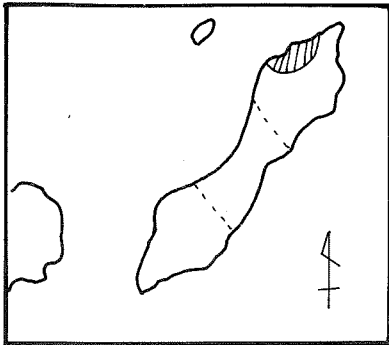
# 潮流

## 目次

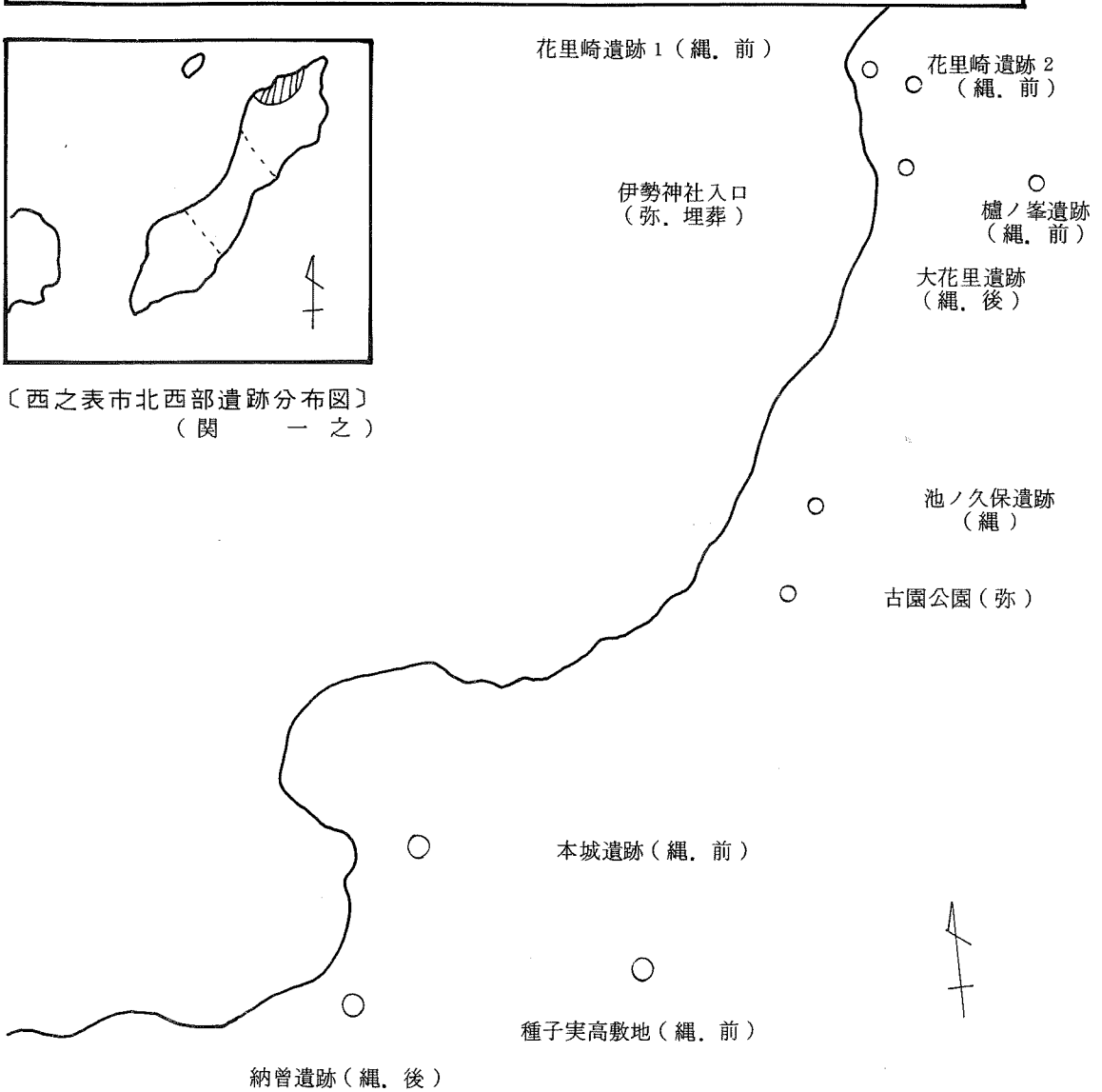
1. 西之表市北西部遺跡分布図 …… 1
2. 江北紀行、松花江岸の遺跡 …… 2
3. 池ノ久保遺跡概観 …… 5
4. 種子島・屋久島考古学文献目録 …… 9

第 1 号 1978. 2

種子島考古学研究会



〔西之表市北西部遺跡分布図〕  
(関 一 之)



# 江 北 紀 行

## 松 花 江 岸 の 遺 跡

佐 竹 伸 七

- (1) 吉林出発
- (2) 泡子沿遺跡
- (3) 烏拉街道
- (4) 棋盤街の風景
- (5) 蛇山遺跡
- (6) 段丘上はお花鳥

チイ リン

### ① 吉林 出 発

吉林市第二松花江右岸一帯を、江北といっている。吾れわれが、江北一帯の段丘遺跡見学団に参加して、吉林駅頭に集まったのは、昭和17年7月17日の午前7時のことであつた。

夜来の雨はやんではいたが、それでもまだ東の空には乱れ雲が流れていて、不安な空模様であつた。

この朝早くから吉林の街には、勇ましいプロペラの爆音が響き渡り、数台の飛行機が密雲の中を縫うようにして飛んでいる。時々低空を飛んで機翼の日の丸がくっきりと白雲に浮かび出ているのが見られた。

それでも私は、この日の天気気が気になつた。こんな日に果たして段丘遺跡見学が決行されるのであろうか。ともすれば不安と焦燥とが私の脳裡をかすめる。しかしこの私の不安はプロペラの爆音がすぐこれを打ち消してくれるのであつた。

吉林駅まで来ると、主催者である吉林新聞社の新井記者、吉林文話会の方々、それに吉林中学校の大浦、石井の両先生が、学生諸君を引率せられて参加せられたので、一行はにわかに賑かなものとなつて総員37名、それに新吉林駅からも一行に参加する者があるとのことで、それを加えると60餘名の多数になるとのことであつた。

もうすぐ発車であるというので急いで汽車に乗つた。車中を見まわすと、吉林史談会長の辻川翁大吉林社の楠部南崖先生、中学校の大浦校長先生同石井教諭、吉林観光協会の安彦先生、木下秀教先生、省立病院の先生、吉林鉄道局の東出、二宮両氏のお顔も見られた。

賑やかに雑談を交えていると、汽車は東団山子(タウン・トゥアン・シャズ)の石器時代の遺跡もいつしか過ぎて、鉄橋近くの竜潭山駅に着いた。一行はこの駅で下車、吉林鉄道会社線に乗り換えねばならぬのである。

北吉林駅行きに乗り換えが済んだ頃、空模様がひどく悪くなって、吉林の屋根といわれる竜潭山

もすっかり黒雲に吞まれそうである。

高さ460米のこの山の頂きには竜潭(ルンタヌ)という底知れぬ池があつて竜が棲むといわれその昔、この池の附近で雨乞いの祈願をしたという竜神の伝説を私は思い浮かべてみた。中国では雨が降ることを下雨(しゃゆい)という。友人の劉(リウ)さんの話によると、以前吉林では雨が乏しかつた。ところがこのごろ雨が日本人について来て、雨天の日が多くなつたと、笑いながら話していることがある。彼らは日本は雨の多い国と思つていたのである。

汽車が新吉林駅に近づくころ、車窓に煙るような静かな江山の風景が観られた。だが、外はどうやら小雨がふついているらしい。汽車は間もなく北吉林駅に着いた。一行はこの駅で下車した。

バオ ズ イェン

### ② 泡 子 沿 遺 跡

細雨に煙る北吉林駅に降りた一行は、新井記者の指揮によって駅前の広野のようなところに集合した。ここで同記者から団体の行動についての注意を受けた。そうしてはじめてここで私を団員に紹介していただいた。

一同は、そば降る小雨の中を縦隊になつてすぐ東に見える泡子沿遺跡、海拔標高(218米)へ歩を運ぶ……………。

泡子沿遺跡は、史前時代の段丘遺跡群の一つであつて、石器や土器が散布しているので有名である。私がこの遺跡で石斧を発見したのは昭和15年9月16日の中秋節の日であつた。それから数年の間戦争中ということもあつて、これといった学術的な調査もなく、遺跡は採石のため破壊されて行く。私は言い知れぬ淋しさを感じて京城大学の藤田先生にこの対策について書面を送つたりしたのであつた。

いわば今回はその第1回の調査である。私は指名により、ここで泡子沿を起点として点在する多くの遺跡と遺物について、簡単な説明をした。これが終わると早速皆と遺物の地上採集に取りかかった。一行は石器や土器の散布している段々のある丘へ登っていく。

観光協会の安彦先生は、早くも段丘の崩れ落ちた断面のところで見事な粘板岩で造られた磨製の石包丁を得られた。吉林鉄道局の二宮氏は、長さ10.5釐、直径5釐の半磨製の石斧1個を得られた。また中学生諸君や先生方も、石斧、灰白色、赤褐色の土器片や土器の却部、底部、把手など夥

しい採集品に喜んでいられたが、われわれの手はいつしか泥まみれになっていて始末がわるい。これが青天だったら、行動も楽で、遺物の発見も容易であろうと思ったりするのであった。

折から雨がどしゃ降りとなったので、遺物採集中止の命があり、近くの人造石油会社の二階に雨宿りをした。

ここで小憩していると、主催者側から一同に對し、次のような提案があった。

「今日はいにく雨天となったが、これから雨が止むかどうかわからぬ、それで今日の段丘見学はこれで中止するか、また続行するか皆さんの御意見は如何、若し中止するならば幸い12時発の汽車がある。」

精悍な新井清五郎記者は、一行の顔を見まわす様につけ加えて言われるのであった。

当日は、相当老令の方々や、子供連れの方も参加されておられたのであった。だが、衆議は一決して、遺跡群を一めぐりして見学することになった。

しばらくして外へ出ると、雨はやみ、四方の野山は急に明るくなって、太陽さえ見え出した。科学する熱心な人々の誠意が天に通じたのであろう。雨露に光る青々とした段丘一帯の草原には、再び楽しい愉快な採集が続けられる……………。

楠部南崖先生がくさむらの中から蛙のような動物らしいものを見つけ、右手にぶら下げてこちらの方に示される。また先生は植物を採集されていた。

新井記者は、石器や鉄片を手にして居られた。また私も丘の斜面の窪地で、5稜角の磨製鉤型石斧1個を得た。この磨製石器の形はちょうど木を削る鉤の歯のようで、片歯と両歯の二種類があって、その用途は皮剥ぎなどに使用されたのではないかと思われる。

また、安彦先生は、白色土製の同心重円の沈紋平板状紡錘車1個を発見されたが、これはこの日の大手柄であった。後日、氏はこの土製品を私に贈呈されたが、泡子沿遺跡に、この様な重円沈紋の紡錘車があることは、その前に一行に御注意したのであったが、かかる完全なものも初めてである。この紡錘車にも二種類があって円板状の物と算盤玉状の物がある。このような形式の土製品の出土例は少ないのではないかと思われる、或は吉林遺跡独特のものではないかとも思ったりするのであった。

### ウラ ③ 烏拉街道

午前11時、泡子沿遺跡遺物採集中止、北方蛇山遺跡へ前進の命が下った。行程は凡そ4軒である。

このコースになっている烏拉街道は、最も古い街として知られていて、最近伊藤氏が研究発表せられたあの名高い烏拉街へ通じている。

行きがかりのところは、泡子沿という満人部落である。その部落に細長い泡子(パオズ)という池がある。水鳥が浮かんだりするこの池は相当深いとのことで、長さは150~160メートルもあろうか、鮒や鯰が漁れるとのことである。

今ではこの池と松花江との距離は約2軒、牛河へは約3軒もあるのであるが、昔はこの何れかの川がここを流れていた。この池はその名残りであろう。松花江の河道がたびたび変わったとの推定は、三家子(サヌチャズ)と口琴(カウチヌ)との間には之を物語る河床が今に残されている。

したがって、泡子沿遺跡を遺した人達は、江の明け暮れを眺めて暮らしたわけで、時にはそこえ浮かぶ鳥を捕えたこともあったのであろうし、また時には川に網を入れて漁をしたりしたこともあったであろう。そして丘のあちこちには、豊かな炊煙が上っていたであろう。

それは遺跡に網のおもりに使った垂石や垂陶の類や、石鏃や焚火をした跡が遺されていることでも推定できる。それにしてもこの遺跡が現在見るような無人の里になったのはいつ頃のことだったのであろうか、私は遠い昔の有様を偲んでみるのであった。

その昔、この辺は高句麗が夫余を討ち、その版図となったところという。それでこのあたりには今でも韓国人(ハングオレヌ)といわれる人達が定着して、水田などを耕している。

### チイ バヌ チエ ④ 棋盤街の風景

満州人部落の泡子沿を過ぎると、次は棋盤街である。ここには朝鮮の人達が住んでいる。

街の中ほどのところに、ささやかな茅葺きの国民学校があって、時々日の丸の旗が掲げられたりしている。

私は、或る日の午後、蛇山遺跡へ行って帰りにこの学校に立寄ったことがある。

その日は、校庭にオルガンを持ち出して、14、5人の女生徒が、舞踊を教えられていた。年の若い方の男の先生がオルガンを弾き、色の小黒いもう50近いと思われる大柄な背の高い男の先生は袖口の短い白いシャツを着て、童謡を歌い、柄には一寸不似合であるが優しい身振りで、羽衣か何かの舞踊を熱心に教えていた。尊い老教育者の姿である。

満州のしかも山間の片田舎でこのような日本的な情景に接するのは、いつまでも忘れ難い印象として残るものである。私は、そっと校庭を覗き込んだが、その日は日曜のためか人の姿は見えなかった。

この街のはずれに、荷車修理と装蹄をするところがあって、その看板には「慶衡鑛炉」と横書された看板が掲げられていた。私はこの田舎街には一寸珍しい看板に注意したのであるが、鉄の字が「鑛」の字に書いてあるのは如何にも面白い

と思った。それで一行中に象形文字学の大家、木下秀教先生の居られるのを幸い、この鏡の字義について先生に御説明をお願いした。

木下先生のお話しによると、鏡は鉄の俗字であって、大の字と弓の字が結合して出来ている。夷は大弓であって、大弓を使用した民族の金がこの鏡なのである。

この鏡を使用した民族が所謂ツングース族であって、漢族から北夷の名を以って呼ばれた。ツングース族は、早くからこの鉄の使用を知っていたのである。

木下先生は、約20分ばかり斯様なことを話されたが、吾々は今、泡子沿遺跡で、鉄器を発見したばかりであり、この看板を前にしての先生のお話は感銘深いものであった。

お話しがすむと前進の命が下り、更に行軍が続けられた。間もなく犍牛河(マオニユハオ)へ出た。この川は、老爺嶺(ラオイエリン=老子を祭る嶺)に源を発して、川には木橋が架せられている。

河水は雨のため濁っていたが、桔梗や、山撫子が咲き乱れていて、川上の入江には、白ズボンの半島人らしい人が投げ網を入れている風景も見られた。

この橋を渡って数町ばかり行くと、もう一つの橋があって、この川は犍牛河の支流であると安彦先生が話された。

安彦先生のお話しによると、この川の上流にあたる天崗(ティエヌガン)には、内地の琵琶湖から移された鮎が放流されていて、そのころ5、6寸位の大きさのものが釣れていたが、その鮎が、こんな松花江本流に近い下流にまで来ているとのことであった。

犍牛河といえ、この川の流域は、牛の産地らしく、青々として起伏した山野のあちこちで牛が草を喰っているのが見られた。私は一度この川を放牧された赤牛の群が渡っているのを見たことがある。牛は14、5頭も居たと思われるが、その渡河の有様は、実に勇壮であって、東満の自然美に、はじめて出会ったように思われた。

### ⑤ 蛇山遺跡

二つ目の橋を渡ると左手の方に部落が見える。これは哈達湾(ハダワン)である。哈達は古代満洲語であって、峰という意味である。この辺の地形は、大小の峰が起伏していて、峰が部落を抱えており、それで哈達湾といわれたのであろうが、しかし湾は入江を意味するところから、昔は長白山を水源とする松花江の本流が、この盆地まで入り込んでいたのであろう。

われら一行は、鉄道線路を横切って、哈達湾部落に通ずる細道へ歩を転じた。

哈達湾部落を通りぬけると、すぐ蛇山である。火崗岩のこの峰は、採石現場になっていて、真白

い山肌を見せている。

蛇山に着いたのは、正午近くであった。誰かが蛇を刺身にして昼食にしようと言い出した。山の上はまだ雨露があるだろうというので、採石のため崖を崩して1米位も積み上げられた石畳の上で楽しい昼食がはじめられた。

我われは、もう朝の雨のことも、すっかり忘れていた。昼食をしながら、この山の蛇の話や、この遺跡についての話などでなかなか眠った。

この山で、蛇と鷹とが喰うか喰われるかの闘争をやるそうだ……。こんな話をしているので誰かと思つて見ると、辻川翁と木下先生であった。私は「古今著聞集」にある摂津国、岐志庄の1丈あまりの耳のある蛇が熊鷹に喰い殺された話を思い出した。

大勢ではしゃぎながら楽しい昼食の一ときである。我われを珍らしそうに立見をしている満人たちもいた。彼等は、一体こんなに大勢でここまで何の用事で日系の人達が来たのか、よほど不審に思っているらしかった。私はこの蛇山近くで耕作している孫樹権さんから聞いた話を思い出していた。すなわちこの山の蛇物語りである。

孫さんの話では、山に棲む蛇は、トウチヨズ・エジボウズ・ウミサンサンウミサンサンの3種があって、トウチヨズは長さ1尺5寸位、色は黒で、中央の腰の部分が丸くふくらんでいて、頭と尻の方は急に細くなっている。エジボウズという蛇は、長さは2尺位、色は青、赤、黒の3色のまじりで、この蛇は人を恐れず、棒をあげると逃げるが、又後から追いかけて来て人の足に喰いつく。咬まれるとそこは腫れ上がるが、別に生命に係るようなことはない。ウミサンサンは、長さ2尺位の蛇で、色は黒で別に特徴のない普通の蛇である。

また、100年ばかり前には、雀のようにチュウチュウチュウチュウとって啼く珍しい蛇が居たと言ひ伝えられているが、今はこの蛇は居ない。

蛇は岩と岩との間に7、8匹づつかたまつていて、天気の良い日には外へ這い出てくるが、曇った日には出てくるようなことはない。

右は孫さんから聞いた蛇物語りであるが、斯様な伝説めいた一寸した話でも我われは聞き棄ててはできない。なぜならば蛇と人とのかわりあいについては、わが国の神話の中でも頗る多いからである。

これらの伝説は、満洲から朝鮮へ、それから日本へ伝搬されたように思われる。

「海内北経」に蛇巫山というがあり、その記事中に「蛇巫山の上に人あり、杯を操り而て東に向て立つ。一名亀山。」その註に「これ即ち大巫山なり、蛇大声して相近く。」とあって孫さんの話もほぼこれと似ている。

わが国の「古今著聞集」や「今昔物語集」などにも蛇と人とのかわりあいのお話が数多く出ている。

昼食が終わると、皆で遺跡になっている北側の丘に登って見た。

蛇山は泡子沿の遺跡と同じく北と南の二つの丘からなっていて、私はこの遺跡で大形の石鍬と石包丁を拾っており、またこの丘に蛇の多いことを知っているのであるが、ある時など、一人で丘へ登ってみると、火崗岩の深い割れ目から這い上がった蛇が身動きもせず、甲らを干していた。その数はあまりに多く、2、30匹も居たと思われたが、ろくろく見もせず逃げ帰った。それで私はこの丘を薄気味悪く思っ一度もここで発掘を試みたことがない。

吉林史談会長の辻川翁が、南側の蛇の棲む丘の方へ登って行かれる。私はその後から声をかけて“蛇の棲む岩穴に案内しましょう”という、翁はあわてて、“そこへは御免だ”と云われて後の方へ引き返してこられた。

### ㊦ 段丘上はお花畠

一行は、立派な段々のある、北側の丘へ登って行く。頂上へ登って下の方を見下ろすと、一段、二段、三段と環状の段がはっきりと見える。頂上の土俵のようになっているところは、直径20米位、基段と基段との間隔は、5米乃至10米位である。

前方後円墳を思わせる段丘は、一面みどりの夏草で覆われ、桔梗、赤百合、山撫子、虎の尾などの草花が美しく咲き乱れていた。

私達は、今美しい大自然の花壇の上に行っているのである。異国の丘は、日本の高山を観る景色とは、よほど趣きを異にしている。

特にこの遺跡では、エデンの楽園を思い出さずにはいられない。旧約聖書に見える伝説では、禁断の木の実を、蛇が勧めたのに動かされ、イブは

~~~~~

## 池ノ久保遺跡概観

鮫島安豊

### 1. 遺跡の環境

池ノ久保遺跡は、西之表の市街地より北へ2km程の古園団地の向側にあたる。標高30mで、遺跡に立つと前方に大隅半島、左前方に古園、美浜町の団地が見える。遺跡の周囲には美浜町より順々に1~2mの小さな河川があり、1番川、2番川、3番川、そして遺跡の左下に4番川が流れている。

現在、遺跡の附近の台地は、海浜よりの吹きあげによって、なだらかな丘陵となっており、小さな松、シャリンバイなどの雑木が自生し、防潮林の役目を果たしている。

この遺跡より約0.3km、東側が池ノ久保の名称のとおり、かって小さな池があり、その池を中心

これを探ってたべ、さらにアダムに分け与えた。そのため神の怒りにふれてこの楽園から追われた。ここでも同じこと、蛇の多いこの遺跡で発掘などはつづしまねばならない。一行中の誰かが発掘用の器具を尋ねたが、この間に対し私はなにも答えなかった。遺跡の破壊を恐れたからである。

楠部南崖先生は、私の俳句の先生である。満洲には満洲の季題があることなどを教えられた。先生はなにか作句の構想でもされている様子であった。また時々思い出したように、植物を採集されていた。

私はふと種子島の西之表にある「馬込の桜」を思い出した。わたくしの俳句の恩師は、種子島西之表の子島西坡宗匠である。ある時、先生のお供をして馬込めの桜を観に行ったことがある。その時、子島先生は、瓢の酒をかたむけて陶然とされていたことを思い出した。

誰かが吉林鉄道局の万代源司氏(植物学)が来ていたらという。異国の秘境にはまた、名の知れぬ花もあるであろう。私の益友万代源司氏は、遠藤博士を団長とする、長白山学術調査団のリーダーとして、今登山中なのである。

一同は段丘のお花畠の上に並んで、記念撮影をした。(未完)

※(注)

本稿は昭和17年(1942)、雑誌「大吉林」に記載された未完結の旧稿である。

当時は戦争日で、わが軍は同年4月1日、ニューギニア上陸、11日、バターン半島占領、18日、米軍機、日本本土初空襲(東京、名古屋、神戸)。同年7月24日、情報局は一県一紙の新聞社統合を発表。

満洲出版協会も法人化された。同紙後記

にして部落が発生している。池上、池口、池下などの姓が残っている。現在、池は杉山となっているが、湿地帯で水神が祠である。発見の手がかりは次のようである。

砂採取業者が砂を採掘する際、約8mの砂を採掘したら、下部より真黒の層およびその直下に赤ボコが発見された。そこで業者は黒色の砂層を一部ゴルフ場へ売却、赤ボコの層を種子島実業高校へ植土として売却した。

ゴルフ場の経営者は運ばれてきた土の中に焼石が多いことに気づき、市教委へ連絡した。市教委では河東瞭氏(博物館長)、樋口兼一氏(文化係長)鮫島安豊(博物館主事)3人で現場に行き、遺物包含層であることを確認した。しかし、ほぼ破壊されていたが、第1号炉址が確認されたので、層位を確認するために単純な方法で記録作成にとりかかった。しかし記録するにつれ、発見が遅れたこと、破壊が進みすぎたことが悔まれてならなかった。

その後、この砂採取工事は中断され、埋め戻されたので、残りについては保存されている。

この報告は、河東氏、樋口氏の協力をえて、鮫島が作成したものである。(第3図)

## 2. 遺跡

遺跡の中心より北側に破壊された炉址が一基、南に20m位離れて一基、計2基の炉址が発見された。そこで北側を第1号炉址、南側を第2号炉址とした。第1号炉址は、すでに破壊されていたので、第2号炉址を調査するために、第1号炉址から第2号炉址に幅1m、長さ21mのトレンチを掘り、層位の確認を行った。北側より2m毎にクイを打ち、それぞれA、B、C、D、E、F、G、H、I、J、K区と区画した。(第4図)

## 3. 層位

A、B、G、H、I、J、K区はすでに掘り削られている。そこでC、D、E、F区について1m50cm掘り下げてその層位を確認した。

第1層は白色砂層であるが、すでにブルによって約8mの砂層が削られている。C、E、F区で1層、2層が攪乱していることがわかる。東側、北側の砂層の壁面に、第1層は更に10層の変化があることがわかったが、ここでは大まかに1層としてとらえた。

第2層は黒色砂層で、約30～40cmの南北にはほぼ水平に推積している。

第3層は暗褐色粘質層で遺物包含層である。B区の一部及びC区で土器、叩石が出土、E区では石皿と思われるものが包含層中にはまっていたが取り上げなかった。なお、F区では炉址と思われる焼石の石組が溝の西側の壁に包含層中に発見されたが、層位の確認だけにとどめ取り上げなかった。尚、第2号炉址の石組の実測の際、炉址の中に含まれる土は3層の暗褐色粘質層であったのでこの炉址の切り込みは4層の真上で行われたことがほぼ類推されたが、すでに1層、2層、3層が炉址近辺は破壊されているので、遺物包含層と炉址との関係は明確でない。

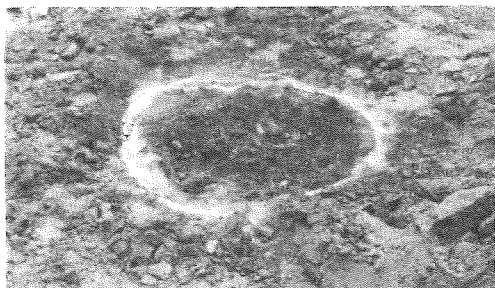
4層は赤褐色の乾燥したパミス層、無遺物層である。

5層は4層の①②として包含されるべきパミス層であるが、ここでは5層として区別した。白黄色の粗粒状のパミスで、10cm内外の幅で水平に推積している。

6層は粘土層であるが、時間の都合でその下部は掘り下げなかった。

実見してないが、土地の人の話しでは、南側、タバコ畑の傾斜面に岩盤が露見しているということから、この6層の下は種子島の基盤である熊毛層の岩盤があると思われる。

## 炉址について(第1図、第2図)



1号炉址は破壊されているので、ここでは第2号炉址について述べる。

2号炉址の径はほぼ120cmの円形で、4層に掘り込まれ1～3層は飛んでいるので一見してその円の内部が黒褐色であるのでみとめやすい。石を取り除くと深さ30cm内外のすり鉢状になり、石組の下部には平たい石を並べ、縁には立てる様にして縁石があり、石と石の間は小さな打製の石片が詰められている。そして、間々に炭化した木片や焼土がぎっしり詰められている。中につめてある石は洗浄してみると、叩石などの石器であることが多い。又、打製の石片が多く石器なのかどうか判断しがたく、一応採取するにとどめ、実測はしなかった。なお、前述したが、地層位確認のため溝を掘ったが、F区の第3層下部に焼石が多数発見され、炉址の一部と思われるものが露見した。しかし層位確認にとどめ発掘はしなかった。もし炉址だとすると第1号炉址から南に10mのところの第3号炉址、それより10m南に第2号炉址が発見されたということになる。又、第2号炉址の実測図(第2図)のブルドーザーによる破壊された溝は第1層、2層、3層を採掘する際のブルドーザーのベルトの溝である。

## 石器

- ① 磨石、叩石に併用されたものであろう。周縁部のみ打痕面があり、一方平らかに研磨された面がある。(表採)
- ② 叩石(第2号炉址内)
- ③ ①と同様、磨石、叩石併用。中央部にも打痕面がある。周縁部のみは打痕により欠損している。あたかも人工的にはがされたかのようである。(C区3層出土)
- ④ 頁岩製の石槍と思われるものだが、C、Dの上部は欠損しているかのようで明らかでない。刃先は人工的に削がれていることが明瞭である(表採)
- ⑤ 叩石、中央部は打痕により凹である。(砂岩第1号炉址内)
- ⑥ 叩石(?)第2号炉址内
- ⑦ 不明(砂岩 C区3層出土)
- ⑧ 磨石、叩石併用
- ⑨ 叩石(砂岩、表採)

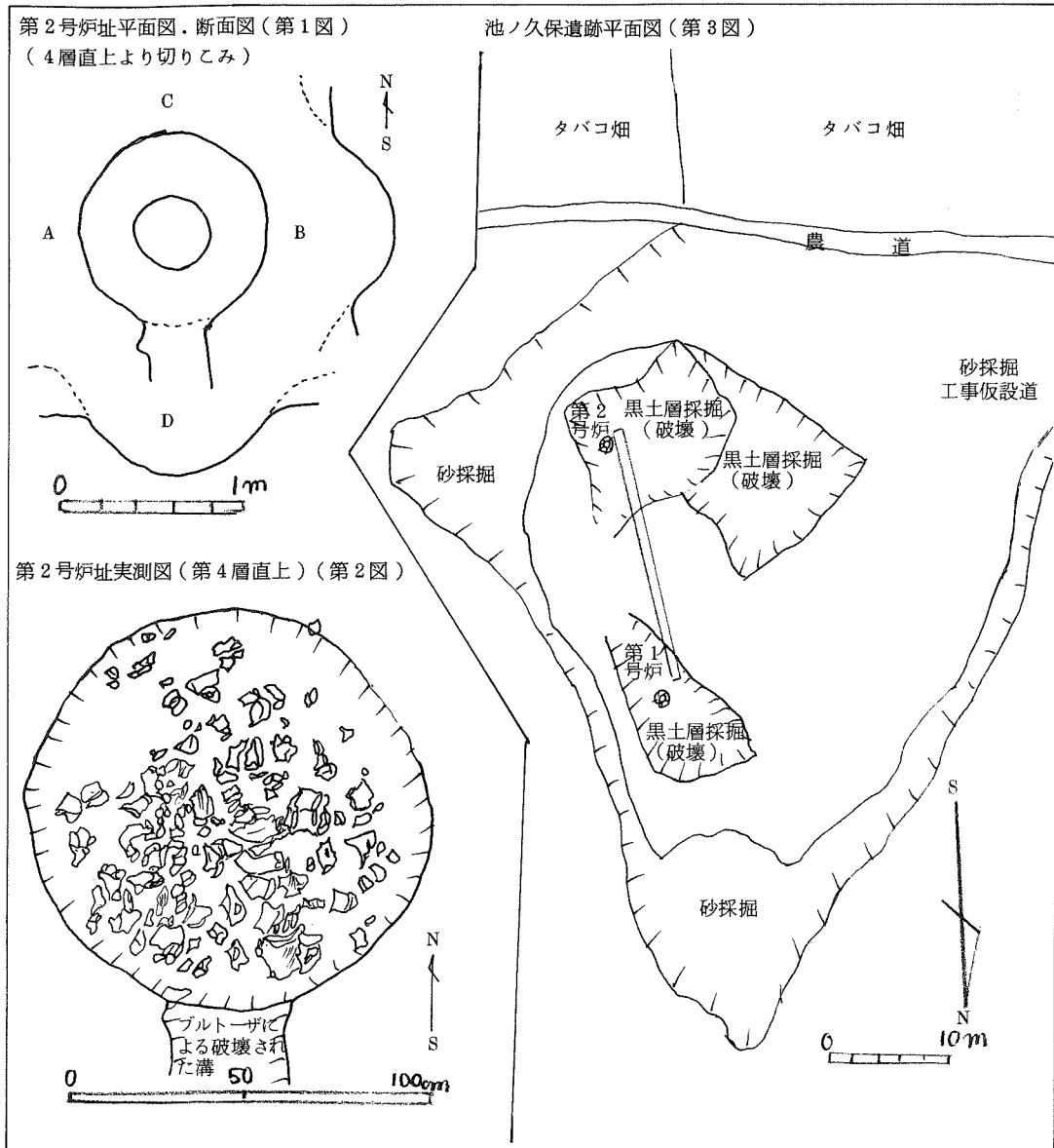
- ⑩ 不明，頁岩製の硬いもので，一面は研磨されている。用途は明らかでない。
- ⑪ 透明の水晶であるが，人工的に加工したのかどうか判明しがたいが，この遺跡で2点採集された。(B区3層)
- ⑫⑬ 半透明の黒耀石(B区3層)
- ⑭ 水晶というより石英といった方が適当かも知れない。人工的な痕跡は見えない。(表採)
- ⑮ 軽石(C区3層)未加工

土器について

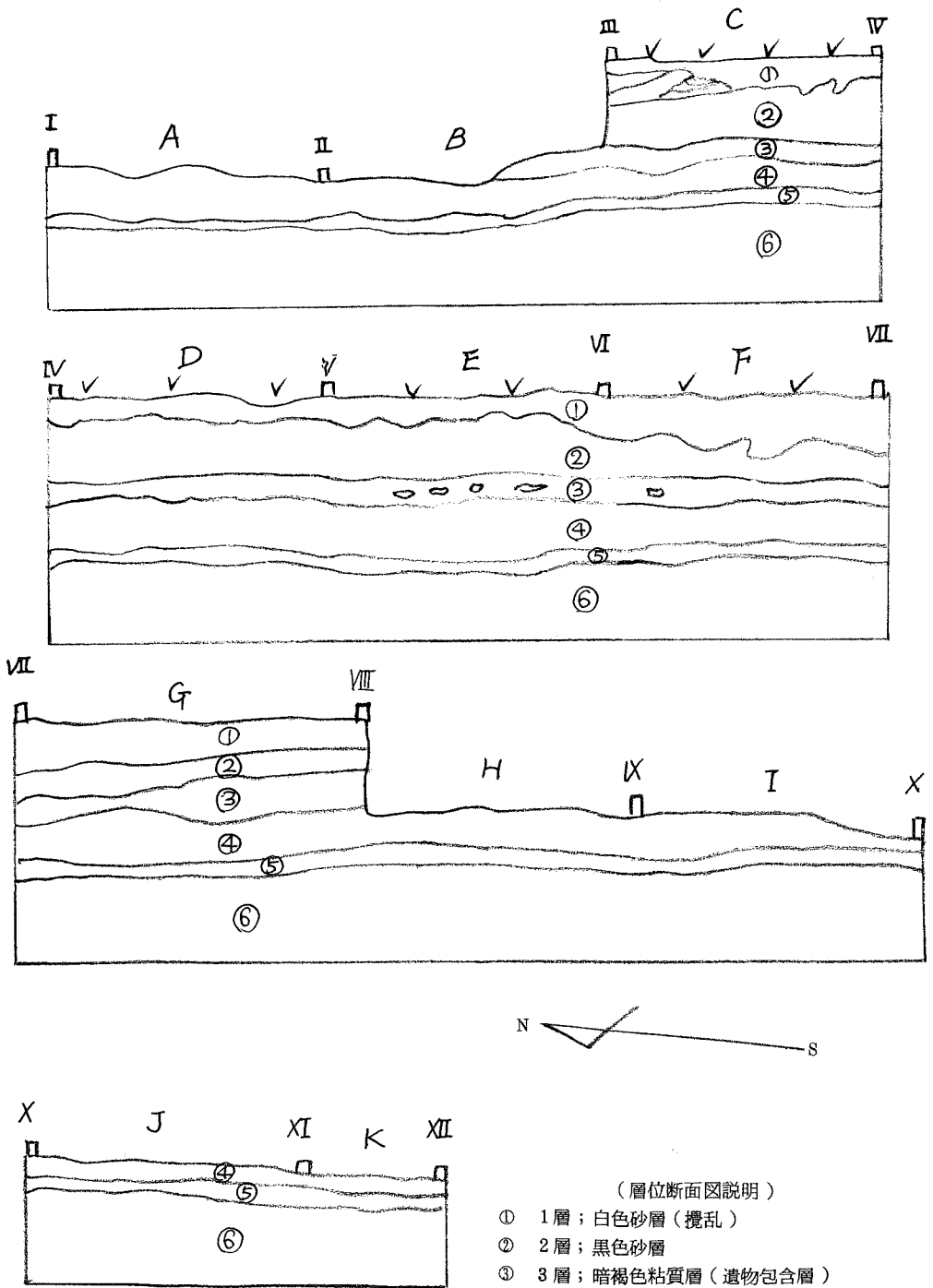
地層位確認のため溝を掘った際，D，E区第3層中で発見されたものが主体であり，その他は表

採である。全体として土器片が小さく，形式・器形を理解するに充分でなく，ここではその中で，とくに土器片が大きく代表的な施文されているものを挙げた。

D石区第3層中で発見された土器は，①②④であるが表採のものと全然異なる土器であることがわかる。非常にもろく比較的薄い。口縁部に3条の隆起線文が波状にめぐらされている。その下部胴部に何かを模したものが線刻がある。同じ胎土で無文のものも一片あった。②は①の胴部位にくるものかも知れない。刺突文が全面に施されている。一見，縄式と思われたが判明しない。土器の実測図は紙面の都合で次号にゆずる。



層位断面図(第4図)



(層位断面図説明)

- ① 1層；白色砂層（攪乱）
- ② 2層；黒色砂層
- ③ 3層；暗褐色粘質層（遺物包含層）
- ④ 4層；赤褐色パミス層
- ⑤ 5層；粗粒状パミス層
- ⑥ 6層；赤褐色粘質層（基盤）



# 「種子島・屋久島に関する考古学文献目録」

鮫 島 安 豊  
関 一 之

- \*明治24年(1891)  
「種子島及び大島の石斧」人類学雑誌7の71。  
若林勝邦著
- \*明治28年(1895)  
「屋久島の石斧」人類誌11巻123号。  
佐藤伝蔵著
- \*昭和12年(1937)  
「種子・屋久原住民の体質人類学的研究」  
人類学雑誌53-10。伊藤五二三著
- \*「上代の種子島-日本文化の南限について」  
歴史地理69-1。角田文衛著
- \*昭和26年(1951)  
「苦浜貝塚」貝塚37。盛園尚孝著
- \*昭和27年(1952)  
「西之表本城遺跡発掘調査概報」  
鹿児島考古学協会紀要2号。河口貞徳著
- \*「種子島・屋久島先史遺跡調査報告」  
鹿児島考古学協会紀要2号。河口貞徳著
- \*「種子島・屋久島発見の石器」  
鹿児島考古学協会2号。国分直一著
- \*「薩南諸島の考古学的調査-種子島北部・屋久島  
一湊における調査」日本考古学協会第11回総会  
発表要旨。三友国五郎。国分直一。河口貞徳著
- \*「種子島の史前時代・屋久島一湊の遺跡」  
ちくら第4号。佐竹忠七著
- \*「種子島国分寺考」ちくら第5号。佐藤愚水著
- \*「国上の石器その他」ちくら第5号。江口清淳著
- \*昭和28年(1953)  
「薩南諸島の考古学的調査」埼玉大学紀要2。  
国分直一。河口貞徳。三友国五郎著
- \*「薩南諸島の先史地理的調査」考古学雑誌39-1。  
三友国五郎著
- \*「種子島苦浜貝塚」鹿児島考古学協会紀要3号。  
河口貞徳著
- \*「中種子町の遺跡」鹿児島考古学協会紀要3号。  
盛園尚孝著
- \*「鹿児島県熊毛郡中種子町屋久津苦浜貝塚につ  
いて」古代学研究。盛園尚孝著
- \*「鹿児島県熊毛郡口永良部城ノ平遺跡」日本考  
古学年報6。国分直一著
- \*昭和30年(1955)  
「屋久島の遺跡」年報4。河口貞徳著
- \*「鹿児島県熊毛諸島の弥生文化1」古代学研究12。  
盛園尚孝著
- \*「考古学から見ても面白い種子島」ちくら第9号。  
盛園尚孝著
- \*昭和31年(1956)  
「人骨を出土せる長崎鼻遺跡について」ちくら第  
12号。盛園尚孝著
- \*昭和31年(1956)  
「南島先史時代」鹿大南方産業研究所報告1の2。
- \*昭和32年(1957)  
「鹿児島県屋久島一湊遺跡」年報5。  
三友国五郎著
- \*「鹿児島県種子島出口遺跡」年報5。国分直一著
- \*「鹿児島県種子島本城遺跡」年報5。国分直一著
- \*「鹿児島種子島安納遺跡」年報5。国分直一著
- \*「鹿児島県口永良部陽向遺跡」年報6。  
三友国五郎著
- \*「種子島広田海岸の埋葬遺跡」日本考古学協会第  
20回総会。国分直一。盛園尚孝著
- \*「鹿児島県屋久島南海岸遺跡」年報6。  
三友国五郎著
- \*昭和33年(1958)  
「種子島広田遺跡の調査の意義」鹿児島史学6号。  
国分直一著
- \*「種子島長崎鼻遺跡出土人骨に見られる下顎中切  
歯の水平研歯例」九州考古3。4。金関丈夫著
- \*「種子島南種子町広田の埋葬遺跡調査概報」  
考古学雑誌43-3。国分直一。盛園尚孝著
- \*「種子島広田遺跡第二次調査」日本考古学協会第  
22回総会発表要旨。国分直一著
- \*「熊毛の先史文化」南日本新聞8月1日号  
盛園尚孝著
- \*「古代史第三回」熊毛政経通信3号。盛園尚孝著
- \*「古代史第四回」熊毛政経通信4。5号  
盛園尚孝著
- \*「古代史その5」熊毛政経通信6号。盛園尚孝著
- \*昭和34年(1959)  
「南島の古代文化と日本先史時代の農耕」国史論  
集。国分直一著
- \*「屋久島一湊に於ける先史遺跡の調査」協会第23  
回総会発表要旨。国分直一。盛園尚孝。重久十郎著
- \*「種子島南種子町広田の埋葬遺跡の第3次発掘調  
査」協会24回総会発表要旨。国分直一著
- \*昭和35年(1960)  
「種子島西之表本城遺跡の調査概報」協会第26  
回総会発表要旨。国分直一。盛園尚孝。重久十郎著
- \*「種子島南種子町広田の埋葬遺跡調査概報」考  
古学雑誌43の3。国分直一。盛園尚孝著
- \*「鹿児島県広田遺跡出土弥生時代人の抜歯につ  
いて」人類学会民族学会第15回大会発表。  
永井昌文著
- \*「種子島広田遺跡の埋葬について」種子島民族7  
号。盛園尚孝著
- \*「本城遺跡を主とする種子島の縄文・弥生時代の  
区分」種子島民族10号。楠木紘一著
- \*「長崎鼻の遺跡。広田遺跡」南種子町郷土誌。

- \*昭和36年(1961)  
「鹿児島県鳥ノ峯埋葬遺跡の調査」協会第28回  
総会発表要旨、盛園尚孝著
- \*「中種子町に発見された覆石墓について」種子島  
民俗13号、盛園尚孝著
- \*「わが南島における動物文彫刻について」協会第  
28回総会発表要旨、国分直一著
- \*「種子島における条理制について」種子島民俗13  
号、平山武章著
- \*「広田弥生時代人の歯牙変形例」解剖学雑誌36  
-1、永井昌文著
- \*昭和38年(1963)  
「鹿児島県熊毛郡広田遺跡」年報10、盛園尚孝著
- \*「鹿児島県熊毛郡城ノ平遺跡」日本考古学年報6、  
国分直一著
- \*「鹿児島県熊毛郡湯向遺跡」日本考古学年報6、  
三友国五郎著
- \*「鹿児島県屋久島南岸の遺跡」日本考古学年報6、  
三友国五郎著
- \*昭和39年(1964)  
「鹿児島県西之表市本城遺跡」年報12盛園尚孝著
- \*昭和41年(1966)  
「南島先史土器Ⅱ」賀川光男著
- \*「南島の先史土器—移入土器と鳥嶼土器について」  
考古学研究13の2、国分直一著
- \*「南西諸島土器文化の諸問題」考古学研究13の  
2、三島格著
- \*「種子島広田遺跡の文化」福岡ユネスコ3号、  
金関丈夫著
- \*「鹿児島県熊毛郡増田鳥ノ峯遺跡」年報14、  
盛園尚孝著
- \*昭和42年(1967)  
「鹿児島県種子島鳥ノ峯遺跡弥生埋葬遺跡第二次」  
協会第33回大会発表要旨、盛園尚孝著
- \*「鹿児島県屋久島一湊遺跡の発掘調査概報」考古  
学雑誌53-2、国分直一、盛園尚孝、重久十郎著
- \*昭和43年(1968)  
「熊毛諸島の先史時代について」日本民族と南方  
文化(平凡社)盛園尚孝著
- \*「先史時代の屋久島」屋久島、河口貞徳著
- \*「南島先史時代の技術と文化」史学研究66号、  
国分直一著
- \*「屋久島の歴史について」南日本文化1号、  
三木靖著
- \*「南島覆石墓のサンゴ石」日本民族と南方文化、  
三島格著
- \*昭和44年(1969)  
「種子島の先史時代」南日本文化2号、  
白木原和美著
- \*「土器型式の変遷」新版考古学講座第4巻原史文  
化(上)、乙益重隆、鏡山猛著
- \*「武部の旧跡」ふるさと、武部老人クラブ編著
- \*昭和46年(1971)  
「対談：南西諸島の考古学研究をめぐって」考古  
学ジャーナル56号、R・ピアソン、国分直一著
- \*「南島資料(1)」古代文化23巻9・10号、三島格著
- \*「南西諸島における古代稲作資料」南島考古第2  
号、三島格著
- \*「南島先史時代の技術と文化」起源論争、  
国分直一著
- \*昭和47年(1972)  
「沖永良部の須恵器」薩琉文化第1巻4号、  
上村俊雄著
- \*「南島先史時代の研究」古代文化24巻5・6号、  
渡辺誠著
- \*「上能野貝塚発掘概報」西之表市教育委員会発行、  
河口貞徳著
- \*「草垣島出土の遺物について」鹿児島考古第6号、  
河野治雄著
- \*昭和48年(1973)  
「上能野貝塚発掘概報」鹿児島考古第7号、  
河口貞徳著
- \*「上能野遺跡」日本考古学年報24号、河口貞徳著
- \*「南島の古代文化の流れ」毎日新聞社、国分直一著
- \*「南島根栽農耕文化の流れ」毎日新聞社、  
佐々木高明著
- \*「シンポジウム—南島の古代文化」毎日新聞社
- \*「原始の鹿児島」鹿児島県の歴史、原口虎雄著
- \*「南島古代文化の系譜」南島の古代文化、  
国分直一著
- \*昭和49年(1974)  
「史前時代」奄美文化誌、長沢和俊著
- \*「古代の茎永」茎永郷土誌
- \*「島間の生いたち」島間小学校創立百年記念誌、  
高重義好著
- \*「大原、宮園遺跡」下甕村教育委員会
- \*「西之表市納曾遺跡概報」鹿児島考古第9号、  
上村俊雄著
- \*昭和50年(1975)  
「種子島の製鉄遺跡から」隼人文化創刊号、  
田村克己著
- \*「南西諸島—考古学より見た南九州」、  
鹿児島大学考古学研究会
- \*「種子島における弥生式土器」鹿児島大学考古学  
研究会紀要第1号、旭慶男著
- \*昭和51年(1976)  
「野国第2遺跡発見の曾畑・轟系土器について」  
沖縄県立博物館紀要2号、新田重清著
- \*昭和52年(1977)  
「国分寺の成立」九州考古学研究、小田富士雄著
- \*「指辺・横峯・中之峯・上焼田遺跡」鹿児島県埋  
藏文化財発掘調査報告書
- \*昭和55年(1960)  
「南島の文化」石器時代の日本、芹沢長介著
- \*昭和58年(1963)  
「日本及びわが南島における葬制上の諸問題」  
民族学研究27の2、国分直一著
- \*「南島レポート」熊本日日新聞11月3日、三島格著

\*昭和40年(1965年)

「南島先史土器」日本の考古学Ⅱ. 賀川光夫著

\*昭和46年(1971年)

「南島考古学の諸問題」協会46年度総会発表要旨. 史学研究86. 国分直一著

\*昭和48年(1973年)

「鹿児島県西之表市本城・田之脇遺跡調査概要」西之表市教育委員会発行. 盛園尚孝著

## 納曾遺跡の概要

上妻紀夫

私は、考古学者でも、考古学の研究者でもないことを、最初にことわっておきたい。考古学では遺跡に名称を付ける場合、その遺跡の所在する地域の名称をとって遺跡の名称とするのが習わしであるようである。たまたま西之表市西之表9939番地小字納曾にある上妻紀夫所有の畑地内で発見された遺跡であるので、納曾遺跡という名称が付けられたのである。

私は、昭和41年3月、永年にわたる教職生活を終え、郷里の現在地に帰り、晴耕雨読の生活を始めた。昭和42年春、自家用のため柑橘を植えようと思い、深さ7~80センチメートルの柱穴を数か所掘ったところ、焼物の破片や石器類が、次々に出てきたので、私は、不思議に思い、これを手にとってよくよく観察した。近代陶器と違って焼物の地肌美しく刻まれた文様があることに気がついた。私の好奇の心は止めようがなかった。その時まで、私は未だかつて縄文土器の破片を自らの手で掘り上げ、手にとってその感触を味わうことがなかったからである。これは一大事と直ちにその付近の耕作を中止した。その後もその他の場所から時おり土器の破片等が発見されたので、細大もらさず丹念に採集することにした。当時、中種子高校教師盛園先生のところに、採集品をもっていき御指導を仰いだ。又市立種子島博物館勤務の鮫島安豊氏に連絡をとり、発掘調査の必要性を訴えた。それから数年後、昭和47年3月当市上能野の貝塚の調査にあたっておられた河口貞徳上村俊雄両先生が鮫島氏の案内で訪問され、表面採取の土器片並びに現地の調査を行い、市来式土器を主体とする遺跡であることを確認された。その折、上妻より発掘調査のお願いをした。この時点で表面採集の石器、土器片はみかん箱一杯と菓子箱数個になっていた。

その後、発掘調査は先生方の都合で、のびのびになっていたが、ようやく昭和49年3月24日に開始された。しかし、調査期間中、半分は雨のため予定期日をはるかにオーバーして、4月4日に終了した。この調査は西之表市の予算がなく、調査員の自費発掘であった。尚、納曾遺跡の概報

は、すでに鹿児島考古第9号に発表されているので、私は、これより引用、抜すいによって概略を述べてみたい。

### ① 遺跡の環境

遺跡は、西之表湾に注ぐ甲女川の北岸に位置し、市街地を見下ろす標高22.67mの海岸段丘上にある。

### ② 遺構

東から西に向かって傾斜しており、中央に浅い溝状の遺構がある。傾斜の末端部に近づくほど木炭、焼土が多くなり、土器も下部にいくほど多量のススのついたものが多く、非常にもろくなっている。傾斜はゆるやかであるが、崖端に位置し、須恵器の窯跡の天井部のない半地下式の登り窯の構造にも似ているように思われた。この遺構は、崖端に迫っていたので、崖崩れをおそれて8割方の発掘で、止むなく中止された。最も肝要と思われる部分の調査がなされていないのは誠に残念である。しかし種子島において縄文時代の遺構が発見されたことは初めての例である。遺構が何であるかは、今すぐに論じられないが、重要な遺構であることは間違いない。今後多くの文献にあたり、諸学兄の意見を求めて後、結論を出しても遅くあるまいと、責任者は報告している。(上村俊雄、旭慶男)

### ③ 出土土器

今回の発掘で出土した土器片の多くは、遺構内より検出されたものであるが、未だほとんど未整理の状態にあるので、以下概略を述べる。

主体をなす土器は、市来式土器である。一般に華麗で文様帯大きく凹線文、貝殻条痕を施すものが多い。器壁は比較的薄く深鉢型が多く底部は平底である。これまでに調査された南島の市来式土器も一般に草野貝塚上層部に出土する市来式に相当すると思われる。市来文化が南島へ伝播する時期を考える上の目やすとなるのではなからうか。主な出土土器の型式は、西平式土器、一湊式土器、型式不明の土器及び乳房状の尖底土器4点等であった。(本田道輝)

### ④ 石器について

本遺跡より出土した石器には叩石、石錘、石斧その他の石器、石製品などがあり、その内叩石の出土器量がめだつて多い。また海岸と近接しているため多くの石器は海岸の浜石を転用したものであると思われる。石器の石質としては、ほとんどが砂岩であるが、出土品の中で石斧は粘板岩や花崗岩の破片が用いられており、磨石の中には花崗岩製のものもあった。発掘中多数の粘板岩や花崗岩の破片が見られたが、それらはその周囲の土とあまりかわらないくらいに風化し、非常にもろくなっていた。出土した石器の主なものは石斧、石錘、砥石、磨石、石匙、コ字型石製品、環状石製品等であった。

## 西之表市北西部遺跡分布図説明(表紙)

1. 本城遺跡(縄文前期) 鮫島安豊  
曾畑式土器の単純遺跡。昭和24年頃、種子島時望氏等によって発見され、昭和34年3月、昭和35年3月、西之表市が市政施行を記念して、盛園尚孝氏、河口貞徳氏、三友国二郎氏、国分直一氏らに依託して発掘調査を行った遺跡である。この発掘で、曾畑式土器の分布が西日本から南西諸島まで広がっていることが確認された。学誌上に残る極めて貴重な遺跡である。その後の発掘で、曾畑式土器の分布は、屋久島一湊、及び先年は沖繩読谷で発見され、縄文時代前期にすでに広汎にわたり交流があったことが実証された。
2. 納曾遺跡(縄文後期)  
昭和49年3月～昭和50年3月、二次にわたって発掘された。一次発掘は、上村俊雄氏(ラ・サール学園教諭)と鹿児島大学考古学同好会によって発掘。第二次発掘は、西之表市教育委員会が上村俊雄氏に委託して行ったものである。出土土器の型式は、市来式、西平式、指宿式、一湊式で、縄文後期後半の種子島における編年を考える上で貴重な遺跡である。
3. 古園運動公園  
古園運動公園の東側に位置する。露見される土器による限り極めて小型の厚手の土器、胎土は粗く、砂粒を多量に含む弥生中期の土器である。
4. 大花里遺跡  
縄文後期の市来式、西平式系統土器の散布地。昭和50年5月、関氏が畑に講を掘る作業中、軽石製の刻彫のある石器4～5点を採集した。  
この軽石の製品は、南九州では上加世田遺跡で、縄文晩期の上加世田式土器に供伴して出土している。しかし、この遺跡では、市来式、西平式系統土器が散布している。そこで、市教委で、鹿児島高校酒匂義明氏に委託して、昭和52年8月、発掘調査を行った。しかし注目加工痕のある軽石製品は発見されなかった。詳細は、近日中に、市教委より報告書作成される予定である。
5. 伊勢神社入口  
土地の古老の話によると、戦時中、道路拡張の際、10体近くの人骨(石を積み、手に貝輪をはめた)が出土したという。場所は海岸より50mほどで、海拔10m前後の砂丘である。又、近くに貝層もあったといわれている。
6. 花里崎遺跡Ⅰ  
昭和50年5月、鮫島らによって発見された遺跡である。しかし、その後、採砂工事により破壊された。表探によって、弥生中期の土器及び縄文前期の曾畑式土器が採集されている。尚、貝殻製の剝片石器、黒曜石製石鏃も表採された。
7. 花里崎遺跡Ⅱ  
⑥と隣りあう位置にあり、⑥の延長遺跡と思われる。曾畑式土器の層と同一層より丸底の深鉢型土器が出土している。器形は極めて曾畑式土器に酷似している。口唇部に波状の帯を貼付し、その上は貝の口縁部の押圧がみられる。文様は全くなく、器面は赤かっ色を呈し、極めていいに調整され、内側には貝殻条痕がある。農道の拡張の際、出土したもので、底部を残してはば完形で、復原し、現在、市立博物館に展示保管してある。
8. 樋ノ峯遺跡

昭和51年8月、樋ノ峯神社の田ノ神様を、写真撮影する為に祠の中を観察したところ、その中に敲石が安置してあった。そこで付近を丹念に調査したら、神社入口の崖面に春日式系統の土器と塞之神式土器の包含層が発見された。

春日式系統土器は、キャリパー型で、口唇部に帯状の貼付があり、貝殻口縁部による押圧がある。又、頸部に蛇体を模したと思われる貼付帯があり、同じく貝殻口縁部による押圧がある。

### 9. 池ノ久保遺跡

前に池ノ久保観覧で述べているので、ここでは省略する。

### ※ ニュース

昭和52年11月25日～昭和53年1月20日、西之表市教育委員会では、現和赤木遺跡の発掘調査を行った。これは県営は場整備事業地内の遺跡で、数年前分布調査によってマークされていた遺跡で、このほど、は場整備を進めるために確認調査を実施したものである。西之表市現和庄司浦の上の台地で赤木・内和・下剝峯・大四郎の4か所である。発掘の技術者は、県教委、文化課新東晃一氏、立神次郎氏があつた。報告書は4月頃、市教育委員会より出版される予定である。

赤木遺跡……………塞ノ神式土器

下剝峯……………縄文前期前葉土器(吉田、前平式土器、その他)及び縄文後期土器、弥生中期土器(打製石斧を含む)

内和……………土師器

大四郎……………攪乱

……………あとがき……………種子島の考古学の研究は昭和24年頃種子島時望氏、江口清淳氏、佐竹忠七氏笹川満堯氏等が中心となり、種子島考古学研究会を発足したことが、郷土誌「ちくら」等に見えている。

戦後の混沌とした社会の中で、数人の先覚者が島の歴史について、西町の和旅館で第一回の考古学研究会を開いているのである。現代の自分達は、文献も必要以上にもつこともできるし、深く研究する機会が多いが、当時の(構か1回に終わった研究会であったようだが)研究会の人達は、あの当時すでに考古学の学問的必要性を痛感されていたのだから全く頭の下がる思いがする。この機関誌を種子島で発行する以上、やはり、まずこのことを忘れてはならないと思うのである。いつまで続けられるかわからないが、恵まれた社会に住んでいる自分達は、せめて昭和32～33年の第一回種子島考古学研究会の意気に劣らぬように、続けなければならないと思うのである。

機関誌名の「潮流」とは、種子島の古代文化は潮の流れを抜きにしては考えられない。いわゆる南と北の接触文化の研究を考えてつけたものである。(鮫島記)

## 潮 流

第 1 号

種子島考古学研究会発行

☎891-31 ☎(09972)3-0606

鹿児島県西之表市西之表7465番地・鮫島方